落合 いずみ（2024）『言語記述論集』17：37-53

アタヤル語群における「人」の再建*

落合 いずみ

帯広畜産大学

キーワード：アタヤル語群、化石接辞、人、男、*Cau

1　はじめに

本稿はアタヤル語群において「人」を表す語を扱う。まず 1.1 節でオーストロネシア語族においてアタヤル語群の占める位置について説明した後に、1.2 節でオーストロネシア祖語において「人」を表す再建形を紹介する。

1.1　オーストロネシア語族におけるアタヤル語群

Blust（1999）によるとオーストロネシア祖語から第一分岐する語群は 10 語群あると考えられている。そのうちの九つの語群が台湾本島で話される言語である。その 9 語群中の一つがアタヤル語群（アタヤル語、セデック語）であり、その他はツォウ語群（ツォウ語、カナカナブ語、サアロア語）、北西台湾語群（パゼッヘ語、サイシヤット語）、西部平原語群（サオ語、バブザ語、パポラ語、ホアニャ語）、東台湾語群（シラヤ語、アミ語、バサイ語、カバラン語）、ブヌン語、ルカイ語、パイワン語、プユマ語である（ブヌン語以下は 1 言語で 1 語群を成す）。台湾本島で話されてきたオーストロネシア諸語は台湾オーストロネシア諸語（Formosan languages）との総称で呼ばれる。残りの一語群はマラヨ・ポリネシア語群であり、台湾本島以外に分布するオーストロネシア諸語を含む。

アタヤル語群にはアタヤル語とセデック語の二つの言語が含まれる[1]。それぞれ二つの方言に大別される。アタヤル語はスコレック方言とツオレ方言に分かれるが、これは移川・

---

* 本稿は「土田滋博士の台湾原住民語資料に基づく研究 2023 年度第 2 回研究会 」（2023 年 12 月 23 日）における筆者の研究発表に基づくものである。助言をいただいた月田尚美氏に感謝する。また、草稿段階において読み合わせを行っていただいた李勝勲氏にも感謝する。ただし本稿の不備は筆者の責任である。

[1] 音素目録筆者の調査によるとアタヤル語スコレック方言の音素目録は母音が/a i u ə e o/、子音が/p b t k g q ʔ s x h r l m n ŋ y w/であるが、*b* は[β]、*g* は[ɣ]、*r* は[ɾ]であり、*r* は母音 *i* の前では[ʐ]で現れる。これに加えツオレ方言に属する多くの集落では子音 *c* /ʦ/を持つ（Li 1981：260）。

また、セデック語パラン方言の音素目録は筆者の調査によると、母音が/a e i u o/、二重母音は/uy/のみ（歴史的に言えばトゥルク方言と同様に、次末音節と最終音節に現れ得る二重母音 *aw* と *ay* があったが、

宮本・馬淵（1935：25）においてアタヤル族は Səqoleq 系統と Tsəʔoleʔ（Səʔoleʔ）系統に分かれるとの分類に相当する。Səqoleq 系統とはスコレック方言のことであり、「人」を表す語である *səquliq* に由来する[2]。Tsəʔoleʔ（Səʔoleʔ）系統とはツオレ方言のことであり、「人」を表すスコレック方言の形式 *səquliq* と同源語である *cəʔuliʔ* または語頭子音の *c* が *s* に変化した形式である *səʔuliʔ* に由来する[3]。

セデック語はパラン方言とトゥルク方言に分かれる。またセデック語における「人」はこの言語名そのものであり、パラン方言では *seʔediq*（または語中の声門閉鎖音が脱落した形式の *seediq*）であり、トゥルク方言では *səʔəʤiq*（または声門閉鎖音の直後の曖昧母音が脱落した形式の *səʔʤiq*）である[4]。

アタヤル語群は他のオーストロネシア諸語との基礎語彙の共通性が低いとされ、オーストロネシア語族の中では非典型的な言語であるとの扱いを受けているが、Li（1985）はアタヤル語群の語彙には特殊な接中辞や接尾辞が付加していることにより、他のオーストロネシア諸語との同源関係が分かりにくくなっていると述べている。

アタヤル語群における「人」を表す形式に関して言えば、小川・浅井（1935: 6）ではアタヤル語の *səquliq* とセデック語の *seʔediq* は、オーストロネシア祖語の「人」に由来するが、それぞれ接尾辞*-liq* と*-diq* が付加されていると観察している。

これらはそれぞれ *o* と *e* に変わった）、子音が/p b t d ʦ k g q s x h m n ŋ l r w/であるが、*r* は[ɾ]に、*y* は[j]に相当する。月田（2009: 56–63）によるとトゥルク方言の母音は単母音が/a i u ə i /、二重母音が/aw ay uy/であり（*aw, ay* は次末音節と最終音節に現れ得るが、*uy* は最終音節に現れる）、子音は/ʦ/が無い以外はパラン方言と同じである。また、月田によるとトゥルク方言において *l* は[ɮ]、*g* は[ɣ]に相当する。

[2] 移川他の表記「Səqoleq」は *səquliq* を表したものであるが、語中子音 *q* の影響により直後の母音がより低い位置で発音される *o* のように聞こえたこと、また語末母音 *q* の影響により直前の母音 *i* がより低い位置で発音される *e* に聞こえたことを示している。「Tsəʔoleʔ（Səʔoleʔ）」は *cəʔuliʔ*（*səʔuliʔ*）を表したものであるが、語中子音*ʔ*の影響により直後の母音がより低い位置で発音される *o* のように聞こえたこと、また語末母音*ʔ*の影響により直前の母音 *i* がより低い位置で発音される *e* に聞こえたことを示している。

[3] ちなみにアタヤルという言語・民族名の由来については Ochiai （2019a）に詳しい。「アタヤル」は一人称包括形代名詞 *ita* い由来し、これに化石接辞*-yal* が付いて *ita-yal* になり、前次末母音の弱化により *əta-yal* となった。さらに語頭の曖昧母音の *a* への変化を経て *ata-yal* になったということである。この形式にも化石接尾辞が付加している点でアタヤル語群の「人」と類似している。

[4] セデック語パラン方言の形式は 2010 年代における筆者のフィールド調査からのものである。セデック語トゥルク方言の形式は、この方言を長年研究してきた月田尚美氏（私信）からのものである。

本稿ではそのようなアタヤル語群の語彙「人」について、小川・浅井（1935：6）の観察を支持し、アタヤル語の「人」、セデック語の「人」が生じるに至った音変化について補足する。さらにセデック語の「男・夫」が、「人」を表す語根に対し接中辞を付加することで生じたことを議論する[5]。その前に1.2節でオーストロネシア祖語における「人」の再建形である*Cauを紹介する。

1.2　オーストロネシア祖語の「人」

2 節からのアタヤル語群の議論に入る前にオーストロネシア祖語の「人」について見ておく。表 1 は Blust and Trussel（2010）によるオーストロネシア祖語*Cau「人、人間」の再建に関わるデータから、台湾オーストロネシア諸語を抜き出したもの（パポラ語からプユマ語まで）である。これらの同源形式を基に、オーストロネシア祖語に*Cau が再建されていることがわかる。

表 1：台湾オーストロネシア諸語におけるオーストロネシア祖語 *Cau「人、人間」の反映形

オーストロネシア祖語	*Cau
パポラ語	*sō*
パゼッヘ語	*saw*
サオ語	*caw*
ホアニャ語	*sau*
ツォウ語	*cou*
プユマ語	*Taw*

2節では、アタヤル語群の「人」はオーストロネシア祖語*Cauに由来した形式を持ちながらも、アタヤル祖語とセデック祖語それぞれにおいて*-liq と*-diq という化石接尾辞が付加した形式である*cəqu-liqと*səə-diqに変わったことを述べ、アタヤル語群祖語を*cəu-liqと再建する。さらに、3節ではセデック祖語の「男・夫」を表す語である*sənawがオーストロネシア祖語*Cau「人」から派生されたことを述べる。この場合はセデック祖語として仮定される反映形*sau に対し、化石接中辞の<*ən*>が挿入され *s<ən>aw* が派生された。4 節において、オーストロネシア祖語*Cau「人」は、アタヤル語とセデック語の「人」並びにセデック語の「男・夫」に保存されているが、前者では化石接尾辞が、後者では化石接中辞が付加しているため、語根との関連が見えにくくなっているとまとめる。

2　アタヤル語群祖語の「人」

[5] ちなみにアタヤル語においてもセデック語においても「人」を表す形式は「他人」をも表す。

2.1 節ではアタヤル語において「人」を表す同源形式を検討し、アタヤル祖語の形式を再建する。2.2 節ではセデック語において「人」を表す同源形式を検討し、セデック祖語を再建する。2.3 節ではアタヤル祖語とセデック祖語の形式を基にアタヤル語群祖語における「人」を再建する。

2.1　アタヤル祖語の「人」

小川・浅井（1935：9）はスコレック方言において「人」を表す形式 *səquliq* を挙げ、これが *səqu-liq* と分解され、前半の *səqu* はオーストロネシア祖語において「人」を表す形式*cau を反映する部分であり、後半の*-liq* は接尾辞であると分析する。本稿はこの分析を支持する。このような接尾辞を落合（2020a：148–150）は化石接尾辞と呼び、そのような化石接尾辞の 1 つとして*-liq という形態があるという[6]。これはアタヤル語ツオレ方言で「肩」を表す形式 *haŋ-a-liq*（語根 *haŋ*、挿入母音 *a*、化石接尾辞-*liq* から成る）に付加している。ただしその後、語末子音の *q* が*ʔ*に変わった。これは Li（1981：248）に述べられているように、アタヤル語群祖語の*q（アタヤル祖語でも*q であると推定される）はアタヤル語スコレック方言とツオレ方言の下位方言の一部では *q* で保存されるが、ツオレ方言のほとんどの下位方言で*ʔ*に変わるとの音変化に即している。また、移川他（1935：25）におけるスコレック系を表す語は *səquliq* であり、ツオレ系を表す語は *cəʔuliʔ*または *səʔuliʔ*であったが、*səquliq* における語中と語末の *q* が、ツオレ系の 2 つの形式では*ʔ*で現れるのも同様の変化である。

また、Li（1981：260）によると、アタヤル語群祖語の子音*c（アタヤル祖語でも*c であると推定される）は、アタヤル語ツオレ方言の多くの下位方言において *c* として保存されている一方で、アタヤル語スコレック方言と一部のツオレ方言下位方言、セデック語において *s* に変化する。

移川他（1935：25）においてスコレック系統の指標となる語は *səquliq* であり、ツオレ系統は *cəʔuliʔ*または *səʔuliʔ*であるが、ツオレ系統の 2 つの形式の中の 1 つである *cəʔuliʔ*では語頭子音として *c* が見られるのに対し、もう 1 つの形式である *səʔuliʔ*では *s* に変化し、スコレック系の形式 *səquliq* でも *s* に変化しているのも上述の変化に即している。後述するようにセデック祖語の形式は*səʔədiq であるので、語頭子音が *s* に変化しているのもこの変化に即している。

スコレック方言の「人」の形式を基準として、ツオレ方言の「人」の形式の特徴を挙げると、語頭子音 *s* が *c* で現れる、または語中子音 *q* が*ʔ*で現れる、または語末子音 *q* が*ʔ*で現れると定義される。語頭子音に関して言えば、ツオレ方言の方がより古い子音である *c* を保存している場合がある一方で、スコレック方言では *c* から *s* に変わった。語中子音と語末子

[6] 落合（2020a）では*-liq がどの段階での祖形か明確に述べていないが、アタヤル祖語を想定していると考えられる。

音の *q* に関して言えば、スコレック方言の方がより古い子音である *q* を保存している一方で、ツオレ方言の多くの下位方言では*ʔ*に変わった。

20 世紀初期に記録されたアタヤル族に関する報告書である佐山（1983a, b）には語彙集が付録として収められており、スコレック系とツオレ系を含む 23 のアタヤル集落において記録された「人」を表す形式が挙げられている。これらアタヤル集落（並びにセデック集落）の分布については図 1 を参照されたい。以下ではこれらの集落で得られた実際の形式を（表 2 参照）、移川他（1925：25）の示した、スコレック方言は *səquliq*、ツオレ方言は *cəʔuliʔ* また *səʔuliʔ* という形式を持つとの大枠に照らして分析してみる。

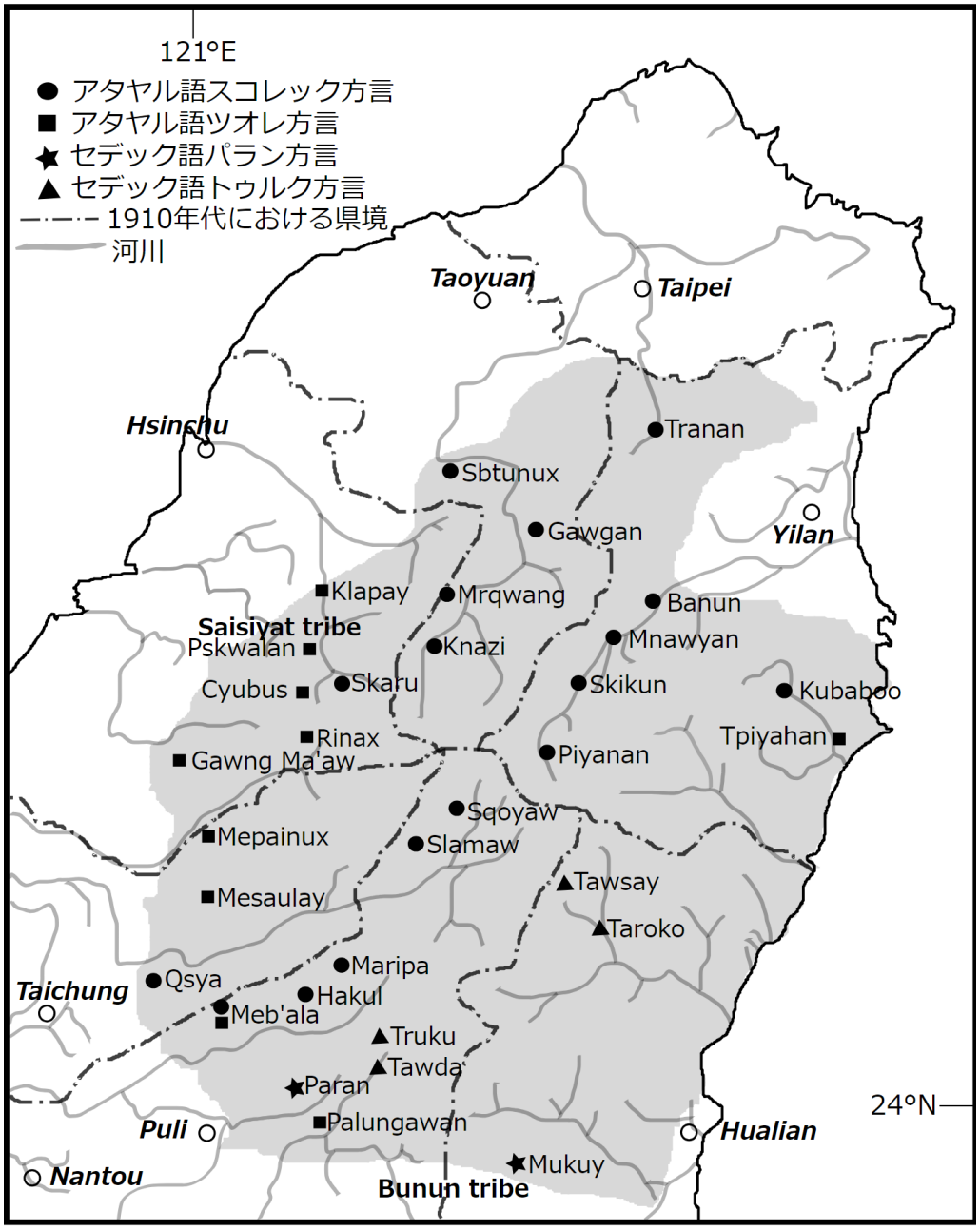

図 1：アタヤル集落とセデック集落の分布

表 2 の左列ではアタヤル集落をスコレック方言であるか、ツオレ方言であるかに分けた。左から二行目の列には集落名を示した。集落名の表記はローマ字表記の集落名の後ろに佐山（1983a, b）で用いられている漢字またはカタカナ表記の集落名を記した 。右から二行目の列では佐山（1983a, b）によるカタカナ表記を示した。右列は佐山（1983a, b）におけるカタカナ表記を基に本稿筆者が音韻的解釈を加えた表記を示した。音韻的解釈の表記では語根と接尾辞を分けて示している。

表 2：アタヤル集落における「人」の形式 [7]

	集落名	佐山（1983a, b）の表記	音韻的解釈
スコレック	Skaru 舍加路	スコレク	*səqu-liq*
	Knazi 嵜拿餌	スコレック	*səqu-liq*
	Tranan 屈尺	スコレック	*səqu-liq*
	Sbtunux 大嵙崁	スコレク	*səqu-liq*
	Gawgan 合歡	スコレック	*səqu-liq*
	Qsya 1 阿冷	スコレック	*səqu-liq*
	Qsya 2 南阿冷	スコレック	*səqu-liq*
	Kubaboo 南澳（クバボー）	スコレク	*səqu-liq*
	Sqoyaw 司加耶武	スコレック、ソコレック	*səqu-liq*
	Slamaw 沙拉茅	ソクレク	*səqu-liq*
	Hakul 白狗	スコレック、ソコレック	*səqu-liq*
	Piyanan 溪頭（ピヤナン）	チコレク	*cəqu-liq*
ツオレ	Pskwalan 巴思誇蘭	スコレク	*səqu-liq*
	Cyubus 鹿場	スコレック[8]	*səqu-liq*
	Banun 溪頭（バヌン）	スコレク	*səqu-liq*
	Skikun 溪頭（シキクン）	スコレク	*səqu-liq*

[7] 表 2 に挙げた集落の中で、宜蘭縣に分布する集落のうち Kubaboo 集落、Piyanan 集落、Skikun 集落、Mnawyan 集落の 4 つの集落については、李（1996：200）にも「人」の形式が挙げられている（Piyanan 集落については 2.1 節本文中の記述を参照）。これら集落の中、ツオレ系の Skikun 集落と Mnawyan 集落については表 2 の形式（つまりスコレック方言の特徴を有する *səqu-liq*）とは一致しない形式（つまりツオレ方言の特徴を有する *cəqu-liq*）が挙げられている。Skikun 集落と Mnawyan 集落において、佐山（1983a, b）が調査した 20 世紀初頭から、李（1996）の調査した 20 世紀末の間に集落構成員のツオレ系・スコレック系の割合に変化が生じ、ツオレ系が多数派となったためにこのような語彙の歴史的変化が見られるのであろうか。

[8] 佐山（1983b：187）において「ク」は小さく書かれている。

Mnawyan 溪頭（マナウヤン）	スコレク	*səqu-liq*
Rinax 汶水	チョコレヤッカ	*cəqu-liq*
Palngawan 萬大	チウリー	*cəʔu-liʔ*
Meb’ala 眉原	チゥレ	*cəʔu-liʔ*
Tpiyahan 南澫（ピヤハン）	チョーレ、スコレー	*cəʔu-liʔ,*
Gawng Ma’aw 大湖	スコレ	*səqu-liʔ*
Klapay 加拉歹	スウレ	*səʔu-liʔ*
Mesaulay 南勢	スリー	*səʔu-liʔ*
Mepainux 北勢	ショーレ	*səʔu-liʔ*

表 2 のスコレック系集落において音韻的に解釈された形式は Piyanan 集落を除いて全て *səqu-liq* で統一されている。移川他（1935：44）によると Piyanan 集落には、ツオレ系集落である Mnawyan 集落から移住した集団も一部混在していたということであり、20 世紀前半に佐山（1983a）が聞き出した「人」の形式は Piyanan 集落におけるこれらツオレ系の調査協力者によるものであった可能性がある。これより時代の下った李（1996：200）における Piyanan 集落の「人」の形式は *səqu-liq* であり、期待されるようにスコレック方言の形式が挙げられている。

ツオレ系集落の形式を見てみると Pskwalan 集落から Mnawyan 集落までの 5 つの集落ではスコレック系と同一の形式 *səqu-liq* が現れる。これら集落の中、Skikun 集落と Mnawyan 集落について李（1996：187）によると、周囲をスコレック方言の集落に囲まれているためスコレック方言の語彙がかなり流入しているとの観察を述べている[9]。さらに馬淵（1954：130–134）では、ツオレ系集落の移住先に後からスコレック系が移入してきて人口を増す事例が多いと述べることから、上述の 5 つの集落において「人」を表す形式をスコレック方言の形式に取り換えた可能性が高い（脚注 8 も参照）[10]。

ツオレ方言に特徴的な形式が現れるのはこれら 5 つの集落以外の集落においてであり、Rinax 集落では語頭子音が *c* である形式 *cəqu-liq* が現れる（同一の形式は Piyanan 集落でも見られる）。Rinax 集落では上述の *q* から*ʔ*への音変化がまだ起きていなかったことがわかる。この *cəqu-liq* における語中・語末子音の *q* から*ʔ*への音変化が起きたのが Palngawan 集落、Meb’ala 集落、Tpiyahan 集落に見られる形式 *cəʔu-liʔ*である。Tpiyahan 集落のもう一つの形式と Gawng Ma’aw 集落の形式では語中・語末子音の *q* の中、語中はそのままであるが語末では*ʔ*に変化して、*səqu-liʔ*となっている。この形式では語頭子音の *c* から *s* への変化も起きている。そして Klapay 集落、Mesaulay 集落、Mepainux 集落の形式では、語頭子音の *c* から *s*

[9] ただし、李（1996：187）の叙述は土田滋氏の私信を基にしている。

[10] ツオレ系集落において、ツオレ方言の「家」を表す語彙をスコレック方言の語彙で取り換える事例は落合（2021：147）にも報告されている。

への変化と語中・語末子音 *q* の*ʔ*への音変化が起きて *səʔu-liʔ*となっている。これらツオレ方言に特徴的な形式をまとめると *cəqu-liq*、*cəʔu-liʔ*、*səqu-liʔ*、*səʔu-liʔ*の 4 つが見られる。

スコレック方言の形式 *səqu-liq* とツオレ方言の形式 *cəqu-liq*、*cəʔu-liʔ*、*səqu-liʔ*、*səʔu-liʔ*の 5 つについて音変化を歴史的に考察してみる。まず、アタヤル祖語の子音*c を保存しているのは、ツオレ方言の 2 つの形式 *cəqu-liq* と *cəʔu-liʔ*である。次に、アタヤル祖語の子音*q を語中と語末において保存しているのは、スコレック方言の形式 *səqu-liq* とツオレ方言の形式の *cəqu-liq* である。このことから、5 つの中で最も古い形式を保っているのはツオレ方言の形式の 1 つに挙げられた *cəqu-liq* であることがわかる。この形式*cəqu-liq をアタヤル祖語として再建することにする。アタヤル祖語の形式から見るとスコレック方言では語頭子音の*c を *s* に変化させた。ツオレ方言の諸形式では、アタヤル祖語の形式 *cəqu-liq* を保存しているものもあるが、*q* を*ʔ*に変化させた *cəʔu-liʔ*も見られる。さらに、*q* から*ʔ*への変化が語中では未適応だが語末に適応された *səqu-liʔ*も見られる。またこの形式では語頭子音*c を *s* に変化させている。そこからさらに語中の *q* も*ʔ*に変化した *səʔu-liʔ*も見られる。以上、佐山（1983a, b）で得られた語彙の範囲内で考察できる歴史的変化を図 2 にまとめる。

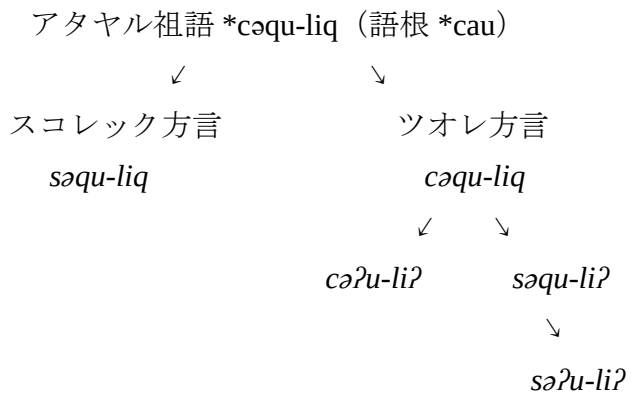

図 2：アタヤル祖語*cəqu-liq「人」からの変化

アタヤル語の 2 つの方言における諸形式から帰納的に再建したアタヤル祖語は*cəqu-liq であり、化石接尾辞*-liq が付加している。次に、この形式をオーストロネシア祖語から下って演繹的に再建し、それを帰納的に再建した形式である*cəqu-liq と比較してみる。

オーストロネシア祖語*Cau「人、人間」をアタヤル祖語で反映させたなら*cau になるはずである。この反映形に対し化石接尾辞*-liq を付加すると、三音節語の*cau-liq [ʦa.u.liq]になる。この形式では母音連続 *au* の前半に当たる *a* は前次末音節、後半に当たる *u* は次末音節を成す。この母音連続 *au* は再音節化により二重母音 *aw* に変化する潜在的な可能性がある。Li（1981：270-272）ではアタヤル語群祖語において次末音節と語末音節それぞれに二重母音*aw（と*ay）が再建されているため、アタヤル祖語においても二重母音*aw を次末音節に許容する。それゆえ前次末と次末をまたぐ母音連続 au から次末音節の二重母音 aw への

変化はありうる。しかも、アタヤル語における内容語は典型的に 2 音節から成る。そのため再音節化によって 3 音節語が二音節語に変化する可能性があるなら、そのように変化するのが妥当と考えられる。その結果、**caw-liq [ʦaw.liq]が生じるはずである。

ところが、帰納的に再建されたアタヤル祖語は期待される**caw-liq ではなく*cəqu-liq であり、本来の語根における母音連続の間に子音 *q* が挿入されている。これは早期アタヤル祖語の段階で語根*cau に化石接尾辞*-liq が付加することで*cau-liq [ʦa.u.liq]が生じたと考えられる。

次に、これはさらに前次末音節の母音弱化を被り*cəu-liq に変わるはずである[11]。なぜなら Li（1981：239）ではアタヤル語とセデック語においてアクセントが置かれる音節より前の音節が弱化する音変化が見られると述べるからである。アタヤル語においてアクセントが置かれる音節は語末音節か次末音節かどちらかであるとのことだが、小川・浅井（1935：22）では基本的に次末音節にアクセントが置かれると述べる。アクセント位置である次末音節より前の音節における母音弱化はアタヤル語とセデック語に共通してみられることから、アタヤル語群祖語においても見られたと考えられる。

そして、母音連続 *au* が敬遠されてそれらの間に子音 *q* が挿入され、*cəqu-liq になったのではないか[12]。早期アタヤル語群祖語から晩期アタヤル語群を経てアタヤル祖語に至るまでの変化の流れを追うと*cau-liq > *cəu-liq > *cəqu-liq となる。

2.2　セデック祖語の「人」

次にセデック語について検討する。パラン方言において「人」を表す形式は *se(ʔ)ediq* である。トゥルク方言では *səʔ(ə)ʤiq* である。なお、トゥルク方言において子音 *d*（および *t*）は母音 *i* の前で口蓋化する（月田 2009：57）。パラン方言の次末音節の *e* は曖昧母音 *ə* に遡る（落合 2016：303–304）。パラン方言の次末音節の *e* は二重母音 *ay* に遡る可能性もあるが

---

[11] もう 1 つの考え方として、早期アタヤル語群祖語*cau-liq に *q* が挿入されて、晩期アタヤル語群祖語では*caqu-liq に変化したという可能性もある。ただし、晩期アタヤル語群祖語に再建形を建てると、セデック祖語との整合性が取れない。2.2 節で述べるようにセデック祖語の場合、挿入される子音は *q* ではなくて声門閉鎖音である。そのため、晩期アタヤル語群祖語では子音挿入の見られない形式であって前次末音節の母音弱化を被った形式である*cəu-liq を建てた。

[12] アタヤル語において母音連続間に *q* が挿入される類例を挙げる。落合（2024：24–25）ではセデック祖語に*gias「幼い動物」と再建されうる語のアタヤル祖語での同源形は*giqas「新しい」になると述べる。セデック祖語で語中の *q* を失った可能性も否定できないが、アタヤル祖語において母音連続間に *q* を挿入したとも捉えられる。後者の場合は、アタヤル祖語の「人」と並行的な変化が起きたと考えられる。

（落合 2015）、ここではトゥルク方言の同源形式における当該音節の母音が *ə* であることから、セデック祖語の次末音節母音として曖昧母音が再建できる。

次末音節はセデック語において強勢が置かれる位置であり母音は安定しているのに対し、それより前の音節は母音の弱化を被る。強勢の置かれる音節より前の音節の母音弱化は Li（1981：239）によると、セデック語に限らずアタヤル語にも見られるアタヤル語群の言語に共通の音変化である。弱化母音はほとんどの場合 *ə* であるが、セデック語パラン方言では *u* で現れる（ただし、セデック祖語における弱化母音は*ə と見なす）。この母音弱化の規則に従えば、セデック語トゥルク方言の形式 *səʔədɬiq* [*sə.ʔə.dɬiq*]では、前次末音節の母音は期待されるように *ə* である。セデック語パラン方言の形式 *seʔediq* [*se.ʔe.diq*]では、前次末音節の母音は期待される母音の *u* ではなく *e* である。これに関し、落合（2016：30）は次末音節と前次末音節における母音が隣接する場合、つまり CV.ʔV.CVC のような音節構造の場合、声門閉鎖音の直後の次末音節母音が直前の前次末音節母音を同化すると述べる[13]。この規則に従い期待される形式である *suʔediq* から、*seʔediq* へと変化した。これらセデック語の同源形式、パラン方言の *se(ʔ)ediq* とトゥルク方言の *səʔ(ə)dɬiq* を比較して得られるセデック祖語は*səʔədiq である。

小川・浅井（1935：6）は、セデック語パラン方言の形式である se*ʔe-diq* を挙げ、これが語根 se*ʔe* と接尾辞に*-diq に分解され、語根はオーストロネシア祖語*Cau を反映したものであると考察している。本稿もこの分析を支持する。

2.1 節で再建したアタヤル祖語は*cəqu-liq であった。セデック祖語*səʔə-diq は、アタヤル祖語の同源語と見なせるが、接尾辞の形式における語頭子音が異なる。アタヤル祖語では*-liq であり、子音 *l* で現れるのに対し、セデック祖語では*-diq であり子音 *d* で現れる。この 2 つの形式をもとにアタヤル語群祖語の接尾辞を推定してみる。

アタヤル語群において*-liq という化石接尾辞は 2.1 節で述べたように他にも語例が見られる。そのため、本来は*-liq という化石接尾辞であったが、セデック祖語において接尾辞の語頭子音の*l を*d に変化させたと考えられる[14]。実際、鳥居（1900a：71）はセデック語に

---

[13] 落合（2016：30）は声門閉鎖音を介した母音調和と説明しているが、本稿では次末音節の頭子音に当たる声門閉鎖音の直後の母音が、声門閉鎖音直前における弱化を被った前次末音節の母音を同化させると修正した。

[14] 子音 *d* と *l* の関連性は通言語的観点からも類例が見られる。李勝勲氏によると、南アフリカ共和国とレソト王国で話されているソト語やツワナ語では *d* と *l* の出現は後続する母音によって決定され、狭母音 *i* と *u* が後続する場合は *d* が、それ以外では *l* が現れるそうである。このうちの狭母音 *i* に関連する論文として藤原敬介氏（私信）から Matisoff（2006）についての指摘を受けた。そこでは *l* から *d* への変化について、通言語的に半母音[j]が介在していることが観察され、それに基づいて *lj* > *ldj*（*d* の音挿入による強化）> *dj* > *d* の流れで変化が起きたのではないかと考察されている。半母音[j]は音声的に母音 *i* に近似して

おいて *l* と *d* とどちらもつかない子音が聞かれるとの観察を述べ、さらにそのような子音の例として shelekka における子音の *l* を挙げている。この語は現代セデック語パラン方言の *se(ʔ)ediq*「人」に相当する。

これに関し、鳥居（1900a、1900b、1901）におけるセデック語パラン方言の語彙を分析した Ochiai（2018：135）と落合（2023：330）では現代セデック語パラン方言において *l* である子音が、鳥居（1900a、1900b、1901）において *d* と表記され、逆に現代セデック語パラン方言において *d* である子音が鳥居（1900a、1900b、1901）において *l* と表記されることがあると述べる。加えて、荒尾（1898）もセデック語パラン方言の語彙集であるが、それらを分析した落合（2020：73–75, 87–89）は現代セデック語パラン方言で *l* である子音が *d* と表記され、逆に本来 *d* である子音が *l* と表記されることがあると述べる[15]。

さらに、化石接尾辞の語頭子音がアタヤル語において *l* であるものが、セデック語において *d* で対応するという類例も見られる。Li（1981：284）によると、アタヤル語群祖語において「蝿」を表す語根は*raŋaw であるが、アタヤル語諸方言において接尾辞*-lid が付加した形式が現れると述べる。落合（2020：147）に基づけば、このアタヤル祖語の形式は*rəŋ-ə-lid と再建されうる。語根の一部*rəŋ（語根*raŋaw から語尾の *aw* が脱落した形式）と化石接尾辞*-lid の間の曖昧母音は子音連続を避けるために挿入された母音である。この同源形式はセデック語パラン方言において *ruŋedi* であり、セデック語トゥルク方言では *rəŋəɗi* である。これらはアタヤル祖語*rəŋ-ə-lid との同源形式と見なすことができ、語中に *ə* が挿入され次末音節母音を成し（パラン方言ではさらに *e* に変化）、接尾辞*-di* が付加している。これら形式を基にセデック祖語は*rəŋ-ə-di と再建できる。つまり、アタヤル祖語とセデック祖語の化石接尾辞はそれぞれ*-lid と*-di であるが、語頭子音 *l* と *d* で異なる。これはちょうど、「人」に付く化石接尾辞がアタヤル祖語で*-liq、セデック祖語で*-diq であるのに対応している。ちなみにセデック祖語では*-lid の語頭子音の *l* から *d* への変化のほかに語末子音の *d* が脱落する変化も起き*-di になった。アタヤル祖語の形式が、セデック語において規則的音対応を示すなら化石接尾辞末尾の*d が無声音の *t* に変わり、*-lit* になるはずであるが、現代セデック語諸方言の「蝿」の形式における化石接尾辞形式*-di* では化石接尾辞末尾の*d を脱落させたことを示している。「蝿」の場合、アタヤル語群祖語の化石接尾辞としては*-lid が再建されるだろう。アタヤル語群祖語の「蝿」に付く化石接尾辞*-lid はセデック祖語に至る過程において

いることから、セデック語の化石接尾辞において子音が *l* から *d* へ変化した（*-liq* > *-diq*）のは母音 *i* の前という類似した条件下で起きたとも考えられる。

[15] しかも、現代セデック語パラン方言において *d* であるが鳥居（1901）と荒尾（1898）では *l* の表記で現れる例に含まれるのが *seediq*「人」である（落合 2023：330、落合 2020：74–75）。この語における *d* は近代に至るまで音声的に *l* に近い響きを持っていたことを示している。

*-did に変わったと推定されるが、子音 *d* が連続するのを嫌ったために化石接尾辞末尾の *d* を脱落させたのではないか。

ここまで「蝿」を表す語を検討し、アタヤル語群祖語の化石接尾辞（*-lid）に含まれる子音*l がセデック祖語の化石接尾辞（*-di）において*d であることを述べた。これは「人」を表す語における化石接尾辞の分岐のパターンと一致する。そのためアタヤル語群祖語における化石接尾辞として*-liq を再建し、セデック祖語では*-diq に変化したと考える。図 3 ではアタヤル語群において「人」を表す語に付加した接尾辞の歴史的変化をまとめる。

アタヤル語群祖語 *-liq

↙　　↘

アタヤル祖語 *-liq　　セデック祖語 *-diq

図 3：アタヤル語群において「人」に付く化石接尾辞の歴史的変化

ここまで、セデック語の 2 つの方言における「人」表す語の形式を比較することにより、帰納的にセデック祖語をは*səʔə-diq と再建した。この形式は語根 *səʔə* と化石接尾辞*-diq に分解される。本稿では語根として切り出された *səʔə* はオーストロネシア祖語の*Cau に由来する形式と見なす。次に、オーストロネシア祖語から下ってセデック祖語に至る過程を演繹的に導き、帰納的に再建された形式である*səʔə-diq と比較してみる。

オーストロネシア祖語*Cau「人、人間」をセデック祖語で反映させたなら*sau になるはずである。この反映形に対し化石接尾辞*-diq を付加すると、三音節語の*sau-diq [sa.u.diq] になる。この形式では母音連続 *au* の前半 *a* は前次末母音、後半 *u* は次末母音を成す。2.1 節でアタヤル祖語について同様の議論をしたように、この母音連続 *au* は再音節化により二重母音 *aw* に変化する潜在的可能性がある。しかも、セデック語における内容語は典型的に 2 音節から成る。そのため、再音節化により 3 音節語が 2 音節に変化する可能性があるなら、そのように変化するのが妥当であり、その結果**saw-diq [saw.diq] が生じるはずである[16]。

[16] セデック語パラン方言において、母音連続 *au*（それぞれ次末音節と最終音節に属する）を持つ語に接尾辞が付加した類似の音変化が起きる。例えば、語根 *taus* [ta.us]「手招きする」に非動作主態・命令の接尾辞-*i* が付加すると *tos-i* [to.ɛi]または *toos-i* [to.o.ɛi]となる。パラン方言において二重母音 *aw* は *o* に変化するので（落合 2015）、前者は *taws-i* [taw.ɛi] に遡ることを示唆する。実際、セデック語トゥルク方言の同源形式は *taws-i* である（月田 2009：112）。そしてこの *taws-i* は *taus-i* [ta.u.ɛi] に遡ぼることを示唆する（ここから母音連続 *au* が二重母音 *aw* へと再音節化され *taws-i* になりさらに *tos-i* になった）。パラン方言のもう 1 つの形式 *toos-i* では長母音の *o* が生じているが、これは語根の *au* が 2 モーラ相当であり、このモーラ数を保持しようとしたために代償延長が起きたと考えられる。

ところが、上記で再建されたセデック祖語は期待される*saw-diq ではなく*səʔə-diq である。本来の語根における母音連続の間に声門閉鎖音が挿入されている。この点は 2.1 節で再建したアタヤル祖語の*cəqu-liq「人」において、本来の語根の*cau 二重母音 *au* の間に子音 *q* が挿入された音変化に類似したものである。

2.1 節において晩期アタヤル語群祖語として再建した形式は*cəu-liq であった。ここからセデック祖語に至るまでの過程を考えてみる。語根における子音 *c* が *s* になり、*səu-liq に変化する。化石接尾辞における子音 *l* が *d* になり、*səu-diq になる。母音連続 *əu* の間に声門閉鎖音が挿入され、*səʔu-diq になる。アタヤル語群祖語からセデック祖語に至るまでの変化の流れを追うと*cəu-liq > *səu-liq > *səu-diq > *səʔu-diq となる。ただし上記の 3 つの音変化が起きた順番の前後については不明であるが、理論上はどの順番でも構わない。

現代セデック語の方言形からセデック祖語に至るまでを帰納的な推定で再建した形式は（i）*səʔə-diq であった。一方、オーストロネシア祖形からセデック祖語に至るまでの変化を演繹的に推定すると最終段階として得られる形式は上述のように（ii）*səʔu-diq となる。演繹的に得られた形式（ii）では次末音節母音は *u* であるのに対し、帰納的に得られた形式（i）では次末音節母音は *ə* である。本来なら形式（ii）が生じるはずであったが、なぜ（i）へ変化したのか、つまりなぜ次末音節母音が *u* から *ə* に変わったのか考察してみる。

これに関し、上述のように落合（2016：30）は次 CV. ʔV.CVC のような音節構造の場合、声門閉鎖音の直後の母音が直前の母音を同化させると述べる（脚注 13 も参照）。直前の母音は前次末音節でこの場合、アクセントの置かれる次末音節の母音がその直前の前次末音節の母音を同化させる[17]。これに従えば、化石接尾辞を付けた形式（ii）*səʔu-diq から*suʔu-diq に変わるはずである。しかし、このような同化は起きなかった。

例外的な変化ではあるが、*səʔu-diq という形式が作られた後で、前次末音節の母音 ə から次末音節の母音への逆行同化が起きたと考えられ、次末音節の *u* が *ə* に変化して*səʔə-diq になったのではないか。

2.3　アタヤル語群祖語の「人」

2.1 節ではアタヤル祖語において「人」を表す形式を*cəqu-liq と再建した。2.2 節ではセデック祖語において「人」を表す形式を*səʔə-diq と再建した。これらはオーストロネシア祖語において「人」を表す形式*Cau の反映形（アタヤル語群祖語では*cau）に対して、アタ

[17] 例えばセデック語パラン方言の *mu-icu*（基底形）が *mi-icu*（表層形）「恐れる」で現れる変化が挙げられる。語根が *icu*「恐れる」であり、静態動詞を表す接頭辞 *mu-*が付加している（これはセデック祖語*mə-と再建されうるが、接頭辞中の母音はパラン方言では弱化母音の *u* に変わる）。セデック語トゥルク方言の同源語は *mi-isug*（形式は Rakaw 他（2006：330）より引用）であり、同様の母音同化が起きている。

ヤル語群祖語に再建される化石接尾辞*-liq が付加したものである。この接尾辞はセデック祖語では*-diq に変わる。

アタヤル語群祖語を再建するなら、まず語根*cau に*-liq を付加した形式は*cau-liq となるが、前次末音節の母音が弱化を被るので*cəu-liq となる。この後、アタヤル祖語とセデック祖語それぞれに至るまでに母音連続の間にそれぞれ子音 *q* または*ʔ*が挿入されることになった。早期アタヤル語群祖語から晩期アタヤル語群祖語に至る過程、さらにそこからアタヤル祖語とセデック祖語に分岐する過程、さらにそれらからアタヤル語諸方言、セデック語諸方言に至るまでの「人」の形式の変化を図 4 に示した。

早期アタヤル語群祖語 *cau-liq（語根*cau）
↓
晩期アタヤル語群祖語 *cəu-liq
↙ ↘
アタヤル祖語 *cəqu-liq　　セデック祖語 *səʔə-diq
↙ ↘
アタヤル語スコレック方言 *səqu-liq*　　セデック語パラン方言 se(ʔ)e-diq
アタヤル語ツオレ方言 *cəqu-liq, cəʔu-liʔ, səqu-liʔ, səʔu-liʔ*　セデック語トゥルク方言 səʔ(ə)-dʑiq

図 4：アタヤル語群における「人」の再建

3　セデック祖語の*sənaw「男・夫」

本節ではセデック語において「男」「夫」を表す語とオーストロネシア祖語の*Cau「人」との派生関係について取り上げる。

セデック語パラン方言において *seno* という形式は「夫」を表す語である。それに対し、*ru-*という接頭辞が付いて *ru-seno* になると「男」という意味になる。

セデック語トゥルク方言における同源語は *sənaw* であり、この形式は原住民族語言研究發展基金會（2020）によると「男」とともに「夫」を表す語である。両方言における形式を基に再建されるセデック祖語は*sənaw となる。セデック語パラン方言では二重母音 *aw* が *o* に変わり（落合 2015）、さらに次末音節における母音 *ə* が *e* に変わった（落合 2016：303–304）。さらにトゥルク方言の意味を考慮すれば、この形式は「男」「夫」の両方を表すものであったことがわかる。

このセデック祖語* sənaw「男・夫」の形式は、オーストロネシア祖語の*Cau「人」から派生されたものではないかと考える。アタヤル語群には、2 節で見た化石接尾辞の他に、化石接中辞も存在する。化石接中辞はその挿入位置によって前方（語頭子音の直後）、中央（最終母音の直前）、後方（語末子音の直前）に分かれ、このうち化石前方接中辞は*<əl>、*<ən>、*<ər>、*<əR>（アタヤル語群祖語の形式で挙げた）が見られる（落合 2022：10–

11）。このうちの接中辞<ən>が、セデック祖語*sənaw に含まれているのではないかと考える[18]。

オーストロネシア祖語の*Cau「人」をセデック祖語で反映させると*sau になるはずである。この形式はセデック語において見られないが、2.3 節ではこの形式に化石接尾辞-diq の付いた形式がセデック祖語の*səʔədiq であることを見た。オーストロネシア祖語*Cau の仮定的なセデック祖語反映形*sau に対し、化石接頭辞の<*ən*>を挿入すると*s<ən>au が得られる。この形式では語末に母音連続 *au* があり、それぞれ別の音節を成すと考えられる。この時点では*s<ən>au は 3 音節語であるが、上述したようにセデック語の内容語は典型的に 2 音節から成るため、3 音節から 2 音節に変化する可能性があるなら、そうすることが妥当である。そのため語末の母音連続が再音節化によって二重母音 *aw* に変わり、*s<ən>aw という 2 音節語を得たのではないか。

さらに、意味論的に考えても、*Cau「人、人間」と*s<ən>aw「男、夫」には強い関連が見られる。この点も、セデック祖語において「男・夫」を表す*s<ən>aw はオーストロネシア祖語の*Cau「人」から派生されたとの考察を支持する。

4　おわりに

表 3 にオーストロネシア祖語 *Cau「人、人間」のアタヤル語群における反映形をまとめた。オーストロネシア祖語*Cau「人、人間」は、アタヤル祖語とセデック祖語の「人」に保存されているが、それぞれ化石接尾辞の*-liq と*-diq が付加している。アタヤル祖語においては、*Cau の反映形である*cau における母音連続の間に子音 *q* が挿入される。また、アタヤル祖語においてもセデック祖語においても、化石接尾辞の付加により一音節前に移動した母音連続において、母音の質に変化が生じる。アタヤル祖語の場合は前次末音節に当たる母音 a が曖昧母音 ə に変化する（*caqu-liq > *cəqu-liq）。セデック祖語の場合は、アタヤル祖語と同様に前次末音節の母音 a が曖昧母音 ə に変化した後、この曖昧母音が直後の母音 u を同化させる（*sau-diq > *səu-diq > *səə-diq）。アタヤル祖語の*cəqu-liq とセデック祖語の*səə-diq から再建されるアタヤル語群祖語は、*cəu-liq である。

表 3：アタヤル語群におけるオーストロネシア祖語 *Cau「人、人間」の反映形

化石接尾辞付加	
（晩期）アタヤル語群祖語	*cəu-liq（語根*cau）
アタヤル祖語	*cəqu-liq
セデック祖語	*səʔə-diq

[18] この化石前方接中辞<*ən*>が含まれる語例として、セデック語トゥルク方言の *r<ən>abaw*「葉」が挙げられる。Ochiai（2019b）が述べるように、これはセデック祖語*rabaw（アタヤル語群祖語*RabaR「葉」から*rabag に変わった後に語末の *g* が *w* に変化）に対して、化石接中辞<*ən*>が挿入されている。

化石前方接中辞付加	
セデック祖語	*s<ən>aw「男」

オーストロネシア祖語 *Cau「人、人間」はアタヤル祖語とセデック祖語の「人」に残存しているが、それぞれ化石接尾辞*-liq と*-diq が付加している。オーストロネシア祖語 *Cau「人、人間」はセデック語の「男、夫」にも残存しているが、化石前方接中辞<*ən*>が付加している。これら化石接辞の付加により、本来の語根*Cau（アタヤル語群祖語*cau）との関連が見えにくくなっている。

参考文献

荒尾英馬（1898）『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』手稿.

Blust, Robert （1999） Subgrouping, circularity and extinction: Some issues in Austronesian comparative linguistics. In：Elizabeth Zeitoun and Paul Jen-kuei Li（eds.）*Selected Papers from the Eighth International Conference on Austronesian Linguistics*. Taipei: Institute of Linguistics （Preparatory Office）, Academia Sinica.

Blust, Robert and Stephen Trussel（2010）*The Austronesian comparative dictionary, web edition*. http://www.trussel2.com/acd［Accessed July 2023］.

馬淵東一（1954）「高砂族の移動および分布（第一部）」『民族学研究』18（1–2）：123–154.

Li, Paul Jen-kuei（1981）Reconstruction of Proto-Atayalic phonology. *Bulletin of the Institute of History and Philology, Academia Sinica* 52（2）: 235–301.

Li, Paul Jen-kuei（1985）The position of Atayal in the Austronesian family. In: Andrew Pawley and Lois Carrington（eds.）*Austronesian linguistics at the 15th pacific science congress*. Pacific Linguistic, pp.257–280.

李壬癸［Li, Ren-kuei］（1996）『宜蘭縣南島民族與語言』宜蘭: 宜蘭縣政府.

Matisoff, James A.（2006）Deltacism of laterals in Sino-Tibetan and elsewhere. *Journal of Chinese Phonology* 14：45–65.

落合いずみ（2015）「セデック語パラン方言の二重母音について」『日本言語学会第 150 回大会予稿集』pp.392–397.

落合いずみ（2016）「セデック語パラン方言における語末 uy の交替」『日本言語学会第 152 回大会予稿集』pp.300–305.

落合いずみ（2016）「セデック語パラン方言の文法記述と非意志性接頭辞の比較言語学的研究」京都大学博士論文.

Ochiai, Izumi（2018）Ryuzo Torii’s Paran Seediq Glossary（1900）: Annotation and observation. *UST Working Papers in Linguistics* 10: 113–143.

Ochiai, Izumi（2019a）Atayal: The origin of the tribal name『國立清華大學世界南島暨原住民族中心電子報』1：52–54.

Ochiai Izumi（2019b）Formosan “leaf” A reconstruction. *The Kobe Gaidai Ronso* 71（1）: 135–152.

落合いずみ（2020）「アタヤル語群における「肩」の再建」『アジア・アフリカ言語文化研究』100：141–153.

落合いずみ（2020）『十九世紀末のセデック語資料『埔里社撫墾署管轄北蕃語集』―百余年後の言語学的考察―』札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター.

落合いずみ（2021）「アタヤル語群における『家』と『屋内』の関連」『島嶼地域科学』2：139–162.

落合いずみ（2022）「セデック語の方言比較から浮き彫りになる化石接中辞」『アイヌ・先住民研究』2：1–29.

落合いずみ（2023）「鳥居龍蔵のセデック語語彙集（1901）への注釈」『帯広畜産大学学術研究報告』 44：328 –339.

落合いずみ（2024）「アタヤル語群の「幼い動物」から再考するオーストロネシア祖語の「新しい」」『島嶼地域科学』5：23–32.

小川尚義・浅井恵倫（1935）『原語による台湾高砂族伝説集』台北: 台北帝国大学言語学研究室.

Rakaw, Lowsi, Jiru Haruq, Yudaw Dangaw, Yuki Lowsing, Tudaw Pisaw, and Iyuq Ciyang 編（2006）『太魯閣族語簡易字典』秀林郷：秀林郷公所.

佐山融吉（1983a）［原書 1918］『蕃族調査報告書：大幺族前編』台北：南天書局.

佐山融吉（1983b）［原書 1920］『蕃族調査報告書：大幺族後編』台北：南天書局.

鳥居龍蔵（1900a）「台湾埔里社霧社蕃の言語（東部有黥面蕃語）」『東京人類学会雑誌』176：71–74.

鳥居龍蔵（1900b）「台湾埔里社霧社蕃の言語（東部有黥面蕃語）」『東京人類学会雑誌』177: 100–104.

鳥居龍蔵（1901）「台湾埔里社霧社蕃の言語（東部有黥面蕃語）」『東京人類学会雑誌』178: 133–137.

月田尚美 （2009）「セデック語（台湾）の文法」東京大学博士論文.

移川子之藏・宮本延人・馬淵東一（1935）『台湾高砂族系統所属の研究』台北：台北帝国大学土俗人種学教室.

原住民族語言研究發展基金會［Yuanzuminzu yuyan fazhen xiehui］（2020）『族語 E 樂園』<https://web.klokah.tw>（最終閲覧日 2023 年 6 月 30 日）.

受理日 2024 年 7 月 1 日